

スコットランドにおけるブリテン意識とプロテスタント帝国
: 1540年－1651年

小林 麻衣子

スコットランドにおけるブリテン意識と プロテスタント帝国：1540年—1651年

小林 麻衣子

はじめに

1970年代にJ.G.A. ポーコックが新たなブリテン史の構築を提唱して以来¹、イングランド中心史観から脱却したブリテン意識の起源及び形成について多くの研究成果が発表されてきた²。L.コリーによると、ブリテン意識は1707年以降、プロテスタント文化を共有してきたイングランド・スコットランド・アイルランドを内包しているイギリスが大英帝国として発展していく中、フランスとの対戦経験を通して醸成されていった³。このコリーの解釈は他の多くの研究成果でも受容され、スコットランドでは1750年以降、スコットランドの伝統と新たなブリテン帝国との間で意識が区別されていったと解釈されている⁴。

しかしながら、スコットランドではブリテン意識は16世紀のスコットランド教会の長老派により「発明」され⁵、人々は常に状況にそくしてブリテンについて積極的に語ってきた⁶。D.アーミティジは1560年前後のスコットランド宗教改革期のプロテスタント帝国構想にブリテン帝国の起源を見出した。しかし、アーミティジは17世紀スコットランドではほんの一部の人々が自らをブリテン人と認識し、むしろ海を越えたアイルランドあるいはヴァージニアでブリテン意識が形成されたと指摘する⁷。スコットランドで形成されたブリテン意識の程度の差はあるが、17世紀前半のスコットランドにおいてブリテンが語られた文脈は、カトリック勢力に対抗するプロテスタント帝国の構築を目指した政治的神学、文明化の過程、国際関係という三点に集約される⁸。これまでこうした三つの特徴のうちのいずれかに着目した研究成果は豊富にある。K.ブ

ラウンはブリテン意識研究が1990年代に出し尽くされたと述べ⁹、K.ボウイはアイデンティティに関する研究成果によりブリテン意識の限界とスコットランド意識の多様性が明らかとなったが、このナショナルな観点を使い過ぎてしまったと述懐する¹⁰。

このようにブリテン意識研究の蓄積がある中、本稿ではブリテン意識が最初に「発明」されたプロテスタント帝国との関連に着目する。これまで1540年代から1603年の同君連合期までを対象としてR.A.メイソン及びA.H.ウィリアムソンはスコットランド教会の長老派とプロテスタント帝国構築の関係性からブリテン意識の形成について論じてきた。1603年頃から1640年代のブリテン内戦期まで、J.ホワイトは戦闘的な反カトリックの言説にブリテン意識を見出した。1650年代のクロムウェルによるスコットランド統治時代から1660年に王政復古した後期ステュアート朝にかけて、A.I.マキネス、C.キッド、D.アランは長老派から継承されてきたプロテスタント文化を基盤としイングランドに影響を受けたブリテン意識について明らかにしてきた¹¹。これらの諸研究では、スコットランド教会の長老派の多くがカトリック勢力に対抗するためにイングランドと連合したプロテスタント帝国の樹立を目指してブリテン国を構想したと解釈され、宗教改革期から17世紀中葉まで単線的に描かれる傾向がある¹²。しかしながらこの約100年の間にはプロテスタント帝国とブリテン意識との関連性に変化が生じ、これまで描かれているほど単線的なものではなかった。

本稿では、1540年から1651年までの間にスコットランド人により書かれた主要な作品を主な史料とし、スコットランドにおけるブリテン意識とプロテスタント帝国の関連性について年代順に再検討し、ブリテン意識の変容について示す。それによりプロテスタント帝国との関連に限定されない多様なブリテン意識が明らかとなり、18世紀のブリテン意識形成への道程を再解釈する一助となるといえよう。

1. イングランド優位のプロテスタント帝国の構想

プロテスタント帝国というスコットランドとイングランドとのブリテン連合

が主張されることになった契機は、イングランド軍がスコットランドに侵攻した1540年代である¹³。1543年にスコットランドとイングランド間で締結されたグリニッチ条約では、イングランドとスコットランドの和平の成立、そしてイングランド王ヘンリ八世の息子エドワード（後の六世）と生後六か月のスコットランドのメアリ女王との婚姻が提案された。イングランドにとってこの条約は、後にスコットランドをイングランドの支配下に置き、そしてローマから離反したイングランドがヨーロッパのカトリック勢力に対抗するために同盟を整える政治的宗教的意図があった。

一方、スコットランド政権側にとってこの条約は、新たに台頭してきたプロテスタントの動きに歩調を合わせること、そしてイングランドというヨーロッパの覇権国と同盟を結ぶことによりヨーロッパ内におけるスコットランドの存在を強固にするというこれまた政治的宗教的意図があった。この条約交渉の時点でスコットランド政権は親イングランド且つプロテスタントのアラン伯率いる勢力が優勢であったが、スコットランド王ジェイムズ五世の寡婦でフランスの貴族出身のマリーが権力を掌握すると、スコットランド議会は同年12月にこの条約を破棄した。これを受け、ヘンリ八世はスコットランドに侵攻して以後8年間交戦した。

ヘンリの死去後、1547年にエドワード六世がイングランド王として即位し、幼き王の摂政となったサマセット公も対スコットランド戦を継続した。対するスコットランドはフランスとの「古い同盟」を復活させ、メアリは1548年8月に渡仏し、1558年にフランスの王太子フランソワ（後の二世）と婚姻関係を結んだ。その間フランスはイングランドに宣戦布告し、三つの王国がこの「手荒な求婚」に関与していくこととなる。そしてこの間、イングランド優位のプロテスタント帝国としてのブリテン連合がスコットランドとイングランドの両国において主張された。

スコットランドのエディンバラの貿易商人且つプロテスタントであったジェイムズ・ヘンリソンはサマセット公に謹呈した『スコットランド人への勧告』（1547年）の中でスコットランドの建国神話を否定し、むしろイングランドの

宗主権を示すために中世以降援用されているジェフリー・オヴ・モンマスの『ブリタニア列王記』のブルータス伝説を支持し、啓示的且つ黙示録的観点からイングランド優位のブリテン連合を呼びかけた¹⁴。ヘンリソンによると、ブリテン島の居住者ブリトン人は共通のブリテン意識を有し、彼らは一人の君主を持ち、グレート・ブリテンは新たな国の名称ではなく古くから使用されていたものである。ヘンリソンは両国の連合を実現させるために、イングランド優位の連合を支持した。ここに従属関係のある二王国間の連合、ブリテン、プロテスタント帝国という要素を有するブリテン意識が見いだされた。こうしたヘンリソンの主張はサマセット公の『書簡』(1548年)に表れているイングランド優位のプロテスタント帝国構想と同様な内容であった¹⁵。ヘンリソン以外にスコットランド内でプロテスタント帝国の形成を目指してイングランド優位の両国の連合を支持する意見も見られたが¹⁶、決して多数派ではなかった。

他方、同時期にヘンリソンの支持する従属的な連合に批判的な『スコットランドの苦情』(1550年頃)も出版された。スコットランドのメアリ女王に献辞が述べられているこの作品では、登場人物スコシア夫人が三人の息子や国の悲惨な現況を嘆き、イングランドに譲歩した者たちを非難している様子が描かれている¹⁷。

このように、スコットランドの一部が支持したサマセット公の連合案には具体性がないものの、イングランド優位のプロテスタント帝国の連合とブリテン意識が密接に結びついていた。

2. 対等なプロテスタント帝国の構想から二重のアイデンティティの構築と多様化へ

従属的連合案から対等なスコットランド・イングランド間のプロテスタント帝国の連合案へと変化したのが、1550年代以降であった。両国においてプロテスタントとして迫害を経験し大陸に亡命していたスコットランド出身の改革指導者ジョン・ノックスは、1558年に三つの作品『女たちの奇怪な統治に対する最初の警告』、『スコットランドの貴族や諸身分に対する訴え』、『スコット

ランドの民衆に対する手紙』を執筆した¹⁸。ノックスはカトリックの女性君主がいかに聖書に反するかを示し、カトリック勢力に抵抗するよう時にはスコットランド、時にはイングランド、時には両国に訴えていた¹⁹。ただしノックスの作品は、先のヘンリソンと比較してそれほど両国の宗教的連合を訴えているわけではなく、反カトリック・カトリックへの抵抗というプロパガンダ的側面の方が強かったといえる。

イングランド女王エリザベス一世の支援により、1560年の改革議会においてスコットランド教会はプロテスタント化を実現した。しかし、フランスにいたスコットランドのメアリ女王は議会の決定を承認することはなかった。夫のフランス王フランソワ二世の急逝に伴い1561年に帰国したメアリは、スコットランド貴族と対立し1567年に女王の座から失脚し、再婚した夫ダーンリ卿との間に生まれた息子ジェイムズがスコットランド王ジェイムズ六世として即位した。これ以降、スコットランド教会は王と対立しながらも長老主義体制を整えていく。

独身であったイングランド女王エリザベスの晩年、ジェイムズ六世の次期イングランド王位継承が現実的になってきた1590年代から、反カトリックを掲げプロテスタント帝国の樹立を目指したブリテン意識がスコットランドの長老派の間で形成され、これに終末論的観点が加味された²⁰。長老派の指導者アンドルー・メルヴィルは、ジェイムズ六世の長子ヘンリが誕生した1594年に「ブリテンのスコットランド人君主の生誕」という題の詩を書き、カトリックに対抗するプロテスタント帝国ブリテン君主の誕生を祝った²¹。

1603年エリザベス女王の死去後、ジェイムズ六世がイングランド王ジェイムズ一世として即位し同君連合が生じると、王自身が両国の「完全なる統合」を推進していった²²。同時に、両国においてブリテン、連合、プロテスタント、反カトリックの言説を用いた作品が数多く出版された²³。長老派ゴツブクロフのデイヴィッド・ヒュームはカトリックに対抗する姿勢を前面に出し、政治的宗教的な連合を主張した²⁴。この時期に出版された諸作品に対してB.ギャロウェイは、それぞれの作品には異なる方向性及びヴィジョンが描かれており、長老

派特有の契約あるいは終末論的言説が見いだされない作品もあると指摘する²⁵。

一方、J. ホワイトは、諸作品に見出せる戦闘的姿勢に着目し、ヨーロッパの文脈と密接に関連してスコットランド及びイングランドの両国には、カトリック勢力に対抗するという共通目的を掲げた戦闘的なプロテスタント帝国としてのブリテン意識が形成されたと論じる²⁶。例えば、1605年の火薬陰謀事件、1617年に開始した三十年戦争²⁷、次男チャールズ王子とスペインのカトリック王女との婚姻案などカトリックの脅威がもたらされる出来事が生じると、両国からカトリック勢力に対抗するためにプロテスタント帝国というブリテンの形成が主張された。ただしこれらの諸作品には両国のプロテスタント内の宗派の相違、すなわちイングランド国教会と長老制教会の相違についてどのように克服するのか明確に記されていない。同君連合期にブリテン連合の賛否をめぐり出版された作品の中には両国の相違点及び類似点を具体的に示した作品もあったが²⁸、戦闘的な姿勢を示した諸作品の多くは、連合案に具体性がなく、反カトリック勢力に対するプロパガンダとして機能していたと考えられる。

この時代のブリテン意識に特徴的な点は、メルヴィルやヒュームなどの長老派の一部がブリテンの枠組みに位置づけ「ブリテンのスコットランド人」と自称して二重のアイデンティティを示し、対等な二国間のプロテスタント連合を支持する作品を書いたことである²⁹。

他方、「ブリテンのスコットランド人」の中にはプロテスタント帝国という宗教的な連合をテーマとせず、作品を書いた者も少なくない³⁰。例えば、アレグザンダー・クレイグは、1603年以降ジェイムズとともにロンドンの宮廷に移り、そこでブリテンを意識しながらスコットランド人として詩作に講じた。クレイグの『恋人の歌、ソネット、哀歌』（1606年）はアイデアに捧げた恋歌で、同著者の『詩的娯楽』（1626年）はヘロデとサロメをテーマとした作品などを収めた詩集である。詩人ディヴィッド・マリーはジェイムズの長子ヘンリの夭折について哀歌『ソフォニスバの悲劇的結末』（1611年）を書き、教師であったアンドルー・シムソンの『文法初歩』（1607年）はラテン語文法の説明をした。詩人ロバート・ファーリーは『光のモラル・エンブレム』（1638年）を出版し、

ヘンリ・ピーチャムのエンブレム集を想起させる内容でエンブレムとともに助言を記している³¹。

これらの作品は、王ジェイムズのスコットランドとイングランドとの完全な連合のヴィジョンに沿うようにブリテンの枠組みで書かれたという解釈も可能であるが³²、少なくとも彼らの作品にはプロテスタント帝国の構想を意図した内容はなく、作品という文化的側面にブリテン意識が反映されていた。こうしたスコットランドで「発明」されたブリテン意識は、スコットランド意識に代替するものではなく、ブリテンの中のスコットランド意識という二重のアイデンティティを意味していた³³。

一方、イングランドでは選ばれた国としての自覚はあったが、スコットランドと連合してプロテスタント帝国を築くという黙示録的ブリテン構想はなく、しかもスコットランドのように二重のアイデンティティである「ブリテンのアングル人」と自称してブリテン意識を示した作品はほとんど確認されていない³⁴。16世紀スコットランドとイングランドは同じプロテスタント文化を共有していたが、後に前者はブリテン意識を形成し、後者は形成せず、それがグレイト・ブリテンという新たな連合国の政治的基盤となることはなかった³⁵。

3. プロテスタント的ブリテン連邦の模索から王権の一体化へ

1625年にジェイムズが死去すると息子チャールズが国王として即位した。この頃にはステュアート家の王はブリテン王として国内外で認識されていた。1633年スコットランドにおけるチャールズ一世の戴冠式がイングランド国教会式の儀式で執り行われたことに対して国内で反発が生じた。チャールズのスコットランド教会に対するイングランド国教会化はさらに続いた。スコットランドの教会総会及びスコットランド議会对に打診なく、説教よりも儀式や典礼を重視したイングランド国教会式祈祷書がスコットランド長老制教会に導入されたため国内でより一層強い反発を招いた。こうしたイングランド国教会との統一を推進するチャールズの宗教政策に対して³⁶、1637年エディンバラの聖ジャイルズ教会において信徒たちが暴動を起こした。翌1638年2月にスコットラン

ド内の貴族、聖職者、都市民、庶民等のあらゆる階層の人々が1590年のスコットランド教会の信仰告白を遵守することを誓う「国民契約」に署名して³⁷、国王の宗教政策に抵抗姿勢を示した³⁸。同年12月グラスゴーで開催された教会総会では、イングランド国教会の組織に特徴的な主教制が廃止された。これ以降、スコットランドはチャールズ一世と第一次主教戦争、第二次主教戦争と交戦し、そこにイングランド議会軍も加わり、アイルランドも巻き込み三王国戦争へと発展していく³⁹。こうした過程でカトリックに対抗するプロテスタント連合の樹立というブリテン意識がスコットランド内で高まっていく一方で、イングランドと締結した「ロンドン条約」(1641年)及び「厳粛な同盟と契約」(1643年)、国王チャールズと締結した「約定」(1647年)を通して対等な王国同士の連邦制の具体的な案が検討されていくことになる⁴⁰。

当初、スコットランドは教会のイングランド国教会化に反発して、文脈は異なるが、かつて使われた戦闘的プロテスタント帝国のレトリックを用いてイングランドから共感を得ようとしていた⁴¹。作品の中では抵抗といった暴力的レトリックはなく、合法・慣例といった言説でもってイングランドの公的領域に訴えていた⁴²。例えば、1644年1月の庶民院の説教で、契約派サミュエル・ラザフォードはスコットランドとイングランドが連合しプロテスタント国ブリテンを形成し、カトリックに対抗するよう呼びかけていた⁴³。

「神との連合、神との一致、三王国の連合が最も望まれている事柄⁴⁴」と明示された「厳粛な同盟と契約⁴⁵」の締結を頂点とし、スコットランドとイングランドの両国はブリテンというプロテスタント的連邦を模索し、国王勢力に対抗する目的を共有していた。1644年2月から1646年10月まで開会された国王軍との戦争について議論されたスコットランド及びイングランド両国の委員会名は「大ブリテン委員会」(*Concilium Amborum Magnae Britanniae*)と称された⁴⁶。

しかしここで特筆すべきは、この「厳粛な同盟と契約」にはブリテンという言葉は一度も使用されていないことである⁴⁷。この宣誓文書には、スコットランドとイングランドを一つの政治体としてまとめるブリテン国への言及はなく、

あくまでも独立している「イングランド、スコットランド、アイルランドの三つの王国」が同盟と契約により別々の国としてまとまる連邦的枠組みを意味していた。

この連邦案は両国の宗教的・政治的相違により実現不可能であることがすぐに判明していく。両国間の宗教の一致について議論する場となったウェストミンスター神学会議での調整は、各国における教会と世俗権力の関係の相違を背景に困難を極め、交渉は難航した⁴⁸。クロムウェル率いる独立派のニューモデル軍が1645年6月ネーズビーの戦いで国王軍に勝利した後、1647年8月にはロンドンの長老派がイングランド議会から追放された。スコットランドはイングランドの権力が長老派から独立派へ移行したと認識して⁴⁹、スコットランド内ではむしろ国王チャールズと組む方が「厳粛な同盟と契約」の内容にそくしてブリテン連合を再編できると考える風潮がでてきた。機をとらえたスコットランドのハミルトン公を中心とした穏健契約派が、先の「厳粛な同盟と契約」を遵守する内容を盛り込んだ「約定⁵⁰」を幽閉中の国王チャールズと1647年12月に秘密裏に結んだ。そしてスコットランド長老制教会内では根強い反対派もいたが、1648年3月にスコットランド議会で「約定」が成立した。この「約定」によりスコットランド内の分裂は顕著となる一方、スコットランドとイングランドとの同盟関係も悪化していった。

危機に対応すべく、アーガイル侯率いる急進契約派が穏健契約派及び約定派からスコットランド政権を奪取し、再度クロムウェルと提携した。1645年の時点でアーガイルは、イングランドとのブリテン連邦を維持しようとしていた⁵¹。しかしスコットランドはあくまでも長老制教会の樹立を掲げたのに対し、イングランドは議会の位置づけを再確立することを重視して宗教統一や連合再編にはそれほど熱心ではなかった。

1649年1月スコットランド政権に打診なく、イングランド議会の決定によりチャールズ一世が処刑され、両国間の関係は修復不可能になった。スコットランドは、スコットランドの王権が不可侵の世襲制により伝統的に継承されてきたことを再認識した。チャールズ一世処刑後の翌2月12日、スコットランド政

権は亡き国王の長子を神の啓示及び合法的な世襲権利により「グレート・ブリテン、フランス、アイルランドの王⁵²」チャールズ二世と宣言し、あえて「ブリテン」という語を用いてステュアート王家の継承を宣言した。ここでスコットランド政権は意図的にブリテン意識と王権を一体化させたのである。同時に、スコットランド政権はチャールズ二世の王位継承権を認めるが、王権の行使については議会に従うという一定の条件をつけており、制限的君主政の原則を確立した⁵³。これによりスコットランドとイングランドは連邦案を破棄しただけでなく、1603年以来の同君連合も解消した⁵⁴。

1650年にはスコットランドとイングランド間で開戦し、一時スコットランド軍が勝利を収めた⁵⁵。しかし、信仰する宗派の相違だけでなく、チャールズ二世の思惑とスコットランド軍の戦争目的は異なっていた。前者は、ブリテン王として再び両国及びアイルランドを統治することを目指し、後者はイングランドに抵抗姿勢を見せるにとどまり、イングランド征服を企図していなかった。二国間の戦争ではすぐにクロムウェルが圧倒的優位に立ち、1651年ウースターの戦いで決着がついた。同年スコットランドはイングランドの「コモンウェルス」の一部となり、事実上イングランドに征服された⁵⁶。

クロムウェルは「グレート・ブリテン」ではなく、「イングランド、スコットランド、アイルランド等々のコモンウェルスのプロテクター」と称し⁵⁷、イングランド主導のコモンウェルス体制を築いた⁵⁸。新たな政権は式典やパレードを通して「コモンウェルス」を創出しようとしていたが、それは「ブリテン」のコモンウェルスの創出を意味していなかった⁵⁹。

同様にスコットランドでも、クロムウェル政権とブリテンを関連させることはなく、むしろ人々はチャールズ二世の即位の際にステュアート王権とブリテンを連動させ、王権とブリテン意識を一体化させたのである⁶⁰。クロムウェル政権下ではプロテスタント帝国と関連したブリテン言説が影を潜め⁶¹、王政復古の1660年前に再びチャールズ二世と連動したブリテン言説が作品の中で多く見られるようになる。

おわりに

1540年代にイングランドによるスコットランドへの侵攻に伴い、ヘンリッソンは両国の連合を実現させるためにイングランド優位のプロテスタント帝国ブリテンを構想した。その約10年後にスコットランド教会のプロテスタント化を実現させるためにノックスは両国の政治的連合ではなく、カトリック勢力に対する抵抗をスコットランド及びイングランドに訴えた。1603年の同君連合が現実味を帯びてくると、二国間の対等な政治的連合あるいは対等なプロテスタント帝国ブリテンを描いた作品が多く出版された。それらの作品にはスコットランド教会の長老派に特有な契約あるいは終末論といった言説、カトリック勢力に対抗する戦闘的姿勢を露わにしたプロパガンダなど多様なブリテン意識が読み取れる。中には「ブリテンのスコットランド人」と自称してこうしたプロテスタント帝国ブリテンを構想した者もいたが、二重のアイデンティティを示しながらも政治的宗教的要素を含まないブリテンを意識した作品も出版された。従って、ブリテン意識は必ずしもプロテスタント帝国構想と結びついておらず、多様な領域でブリテン意識が形成されていったのである。

国王チャールズ一世の宗教政策に反発して1637年にスコットランドで暴動が起き、アイルランドを含めたブリテン内戦が展開されていくと、プロテスタント帝国構想と関連したブリテン意識が復活していった。その一方で、スコットランドとイングランドはより具体的なプロテスタント的連邦の枠組みを模索していった。しかし1649年にチャールズが処刑された後、プロテスタント的連邦案だけでなく、同君連合も消滅した。ここでスコットランドは、クロムウェル率いるイングランドのコモンウェルス政権に対峙し、ブリテンと王権を一体化させステュアート王家にブリテン国の創出を託した。ただし、スコットランド政権は王権の継承と行使を区別し、条件付きの王権行使を可能とする制限的君主政の原則を確立した。

このように1540年から1651年までのスコットランドでは、多様なブリテン意識が形成されていき、プロテスタント帝国とブリテン意識の関連性は薄れ、むしろ意図的に王権とブリテン意識が一体化したのである。

謝辞

本稿はJSPS科研費17H02231の助成を受けたものである。

註

- 1 J.G.A. Pocock, *The Discovery of Islands: Essays in British History* (Cambridge, 2005) ch.2 'British History: A Plea for a New Subject (1973/1974)'.
- 2 J.G.A. Pocock (ed.), *The Varieties of British Political Thought, 1500-1800* (Cambridge, 1993); S.G. Ellis and S. Barber (eds), *Conquest and Union: Fashioning a British State, 1485-1725* (London, 1995); B. Bradshaw and J. Morrill (eds), *The British Problems, c.1534-1707: State Formation in the Atlantic Archipelago* (London, 1996); B. Bradshaw and P. Roberts (eds), *British Consciousness and Identity: The Making of Britain, 1533-1707* (Cambridge, 1998); G. Burgess (ed.), *The New British History: Founding a Modern State 1603-1715* (London, 1999); C. Kidd, *British Identities before Nationalism: Ethnicity and Nationhood in the Atlantic World, 1600-1800* (Cambridge, 1999). 岩井淳編著『複合国家イギリスの宗教と社会：ブリテン国家の創出』ミネルヴァ書房、2012年；古谷大輔、近藤和彦編『礫岩のようなヨーロッパ』山川出版社、2016年。
- 3 L. Colley, *Britons: Forging the Nation 1707-1837* (New Haven, 1992) [川北稔監訳『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会、2000年]
- 4 C. Kidd, *Subverting Scotland's Past: Scottish Whig Historians and the Creation of an Anglo-British Identity, 1689-c.1830* (Cambridge, 1993).
- 5 Ian Bradley, 'Britishness: A Scottish Invention', *History Today* 64:5 (May 2014) 3-4. 同著者はスコットランド、イングランド、アイルランド、ウェールズの価値観や思想がブリテンの形成にどのように寄与したか論じている。Ian Bradley, *Believing in Britain: The Spiritual Identity of Britishness* (Oxford, 2007).
- 6 R.A. Mason, 'Debating Britain in Seventeenth-Century Scotland: Multiple Monarchy and Scottish Sovereignty', *Journal of Scottish Historical Studies* 35:1 (2015) 1-24.
- 7 D. Armitage, *The Ideological Origins of the British Empire* (Cambridge, 2000) [平田雅博他訳『帝国の誕生：ブリテン帝国のイデオロギー的起源』日本経済評論社、2005年]
- 8 A.I. Maciness, 'Regal Union for Britain, 1603-38', in Burgess (ed.), *The New British History*, 33-64. 17世紀のスコットランド意識については以下を参照。K. Brown, 'Scottish Identity in the Seventeenth Century', in Bradshaw and Roberts (eds), *British Consciousness and Identity*, 236-258.
- 9 K. Brown, 'Early Modern Scottish History— A Survey', *Scottish Historical Review* 92 (2013) 5-24.
- 10 K. Bowie, 'Cultural, British and Global Turns in the History of Early Modern Scotland', *Scottish Historical Review* 92 (2013) 38-48.
- 11 A.H. Williamson, *Scottish National Consciousness in the Age of James VI: The Apocalypse, the Union, and the Shaping of Scotland's Public Culture* (Edinburgh, 1979); A.H. Williamson, 'Scotland, Antichrist and the Invention of Great Britain', in John Dwyer et al. (eds), *New Perspectives on the Politics and*

- Culture of Early Modern Scotland* (Edinburgh, 1982) 34-58; A.H. Williamson, 'Patterns of British Identity: 'Britain' and Its Rivals in the Sixteenth and Seventeenth Centuries', in Burgess (ed.), *The New British History*, 138-173; R.A. Mason, 'The Scottish Reformation and the Origins of Anglo-British Imperialism', in R.A. Mason (ed.), *Scots and Britons: Scottish Political Thought and the Union of 1603* (Cambridge, 1994) 161-186; J.C. White, 'Militant Protestants: British Identity in the Jacobean Period, 1603-1625', *History* 94 (2009) 154-175; J. White, *Militant Protestantism and British Identity, 1603-1642* (London, 2012); A.I. Macinnes, *Union and the Empire: The Making of the United Kingdom in 1707* (Cambridge, 2007); C. Kidd, 'Protestantism, Constitutionalism and British Identity under the Later Stuarts', in Bradshaw and Roberts (eds), *British Conscientiousness and Identity*, 321-342; D. Allan, 'Protestantism, Presbyterianism and National Identity in Eighteenth-Century Scottish History', in T. Claydon and I. McBride (eds), *Protestantism and National Identity: Britain and Ireland, c.1650-c.1850* (Cambridge, 2007) 182-205; B.P. Levack, *The Formation of the British State: England, Scotland, and the Union, 1603-1707* (Oxford, 1987).
- 12 ウィリアムソンはブリテン意識とスコットランド意識の曖昧さが1638年の反乱を引き起こしたと指摘する。Williamson, 'Scotland, Antichrist'. ホワイトはプロテスタント帝国構想のブリテン意識から内戦、そしてチャールズ処刑に至ったと解釈する。White, *Militant Protestantism*. マキネスは1608年のカルヴァン裁判で見られたブリテンの統一性という思考から1638年のスコットランドの国民契約へと発展していったと捉える。Macinnes, 'Regal Union for Britain', 46.
- 13 M. Merriman, *The Rough Wooings: Mary Queen of Scots, 1542-1551* (East Linton, 2000) 48.
- 14 James Harryson, *An Exhortacion to the Scottes to Conforme Themselves to the Honourable, Expedient, and Godly Union Between the Two Realmes of England and Scotland (1547)*, in *The Complaynt of Scotlande: vyth ane Exhortatione to the Thre Estatis to be Vigilante in the Deffens of Their Public Veil*, ed. by J.A.H. Murray (London, 1872) 207-236.
- 15 サマセット公が『書簡』の執筆者として刊行されているが、『スコットランド人への勧告』との類似点から実際にはヘンリソンが書いたと指摘されている。Williamson, 'Scotland, Antichrist', 37; Mason, 'The Scottish Reformation and the Origins of Anglo-British Imperialism', 174. M. Merriman, 'James Henrisoun and 'Great Britain': British Union and the Scottish Commonweal', in R.A. Mason (ed.), *Scotland and England 1286-1815* (Edinburgh, 1987) 85-112.
- 16 ヘンリソンの他に、スコットランド出身の聖職者ジョン・エルダーもブルータス伝説から援用されるイングランド優位のプロテスタント連合を支持していた。John Elder, 'A Proposal for Uniting Scotland with England, Addressed to King Henry VIII', in *The Banmatyne Miscellany*, i, ed. by W. Scott and D. Laing (Edinburgh, 1827) 1-18, esp.11, 14. ただし、エルダーは後にカトリックのメアリ女王とスペイン王子との結婚を帝国の形成として祝しているため必ずしもプロテスタント帝国を支持していたわけではない。
- 17 *The Complaynt of Scotlande*, 70, 73-74; Robert Wedderburn, *The Complaynt of Scotland* (c.1550), intro. by A.M. Stewart (Edinburgh, 1979) ix. この作品とデイヴィッド・リンジーの作品との類似が指摘されている。

- 18 John Knox, *On Rebellion*, ed. by R.A. Mason (Cambridge, 1994).
- 19 拙稿「16世紀スコットランドの知的潮流—王と人民との契約的観念と抵抗権論」『ピューリタニズム研究』10, 2016年, 14-21頁。
- 20 Williamson, *Scottish National Consciousness*; Williamson, 'Scotland, Antichrist'. イングランドでもプロテスタント連合ブリテン国の強みを主張した作品が出版されたが、エリザベス女王自身はそうしたブリテン国形成に興味を示していなかった。R.A. Mason, 'Scotland, Elizabethan England and the Idea of Britain', *Transactions of the Royal Historical Society* 14 (2004) 279-293. 反カトリック意識については Christopher Hill, *Antichrist in Seventeenth-Century England* (London, 1971) を参照。
- 21 P.J. McGinnis and A.H. Williamson (eds), *George Buchanan: The Political Poetry* (Edinburgh, 1995) 276-81. 法律家トマス・クレイグもブリテン王ヘンリの誕生を祝う詩を書いた。
- 22 王には明確なブリテン連合案がなく、しかも人々の間にブリテン意識を根づかせるのに失敗したが、これを契機として人々が絶えずブリテンを意識するようになった。J. Wormald, 'James VI, James I and the Identity of Britain', in Bradshaw and Morrill (eds), *The British Problem*, 148-171.
- 23 *The Jacobean Union: Six Tracts of 1604*, ed. by B.R. Galloway and B.P. Levack (Edinburgh, 1985).
- 24 P.J. McGinnis and A.H. Williamson (eds), *The British Union: A Critical Edition and Translation of David Hume of Godscroft's De Unione Insulae Britanniae* (Aldershot, 2002).
- 25 B. Galloway, *The Union of England and Scotland, 1603-1608* (Edinburgh, 1986) 52.
- 26 White, 'Militant Protestants', 154-175.
- 27 S. Murdoch (ed.), *Scotland and the Thirty Years War, 1618-1648* (Leiden, 2001). 三十年戦争の際、チャールズは地方のネットワークに頼ってスコットランド人をデンマーク・スウェーデンのプロテスタント軍に派遣しブリテンとして外交に関与していたものの、実際にはブリテン意識やブリテン国家が形成されていたわけではなかった。J. White, 'State Power, Local Autonomy, and War in Scotland, 1625-9', *Journal of Scottish Historical Studies* 36:2 (2016) 143-164.
- 28 拙稿「ジェームズ一世の「グレイト・ブリテン王国」構想」指昭博編『王はいかに受け入れられたか：政治文化のイギリス史』刀水書房, 2007年, 78-97頁。
- 29 1614年から1627年にかけて「北ブリテン人」と称して書かれた作品が出版された。この北ブリテン人意識は主に18世紀の啓蒙の時代を対象として研究されてきた。C. Kidd, 'North Britishness and the Nature of Eighteenth-Century British Patriotisms', *The Historical Journal* 39:2 (1996) 361-382.
- 30 Allison Steenson, 'Writing Sonnets as a *Scoto-Britane*: Scottish Sonnets, the Union of the Crowns, and Negotiations of Identity', in E.V. Contzen and Luuk Houwen (eds), *Medievalia et Humanistica: Writing Identity in Medieval and Early Modern Scotland* (Rowman and Littlefield, 2016) 195-210. ジェームズ治世期に宗教的内容を含まないラテン語の詩の文化が最も栄えた。S.J. Reid, 'A Latin Renaissance in Reformation Scotland? Print Trends in Scottish Latin Literature, c.1480-1700', *Scottish Historical Review* 95:1 (2016) 1-29; S.J. Reid and D. McOmish (eds), *Neo-Latin Literature and Literary Culture in Early Modern Scotland* (Leiden, 2017); C. Gribben and D.G. Mullan (eds), *Literature and the Scottish Reformation* (Farnham, 2009).
- 31 同君連合後、王ジェームズが初めてスコットランドに帰国したのを祝した詩「ムーサ

- の歓迎」のように「ブリテンのスコットランド人」と自称せず、ブリテン意識が看守される作品もある。R.P.H. Green, 'The King Returns: *The Muses' Welcome* (1618)', in Reid and McOmish (eds), *Neo-Latin Literature*, 126-162; J. Stevenson, 'Adulation and Admonition in *The Muses' Welcome*', in D.J. Parkinson (ed.), *James VI and I, Literature and Scotland: Tides of Change, 1567-1625* (Leuven, 2013) 267-281.
- 32 ジェイムズは詩を政治的に活用していた。J. Rickard, *Authorship and Authority: The Writings of James VI and I* (Manchester, 2007) 176.
- 33 多くの貴族たちの間で表面上ブリテン意識あるいはアングロ化は形成されたかもしれないが、宮廷外ではそうした思想は浸透しなかった。K.M. Brown, 'The Origins of a British Aristocracy: Integration and Its Limitations before the Treaty of Union', in Ellis and Barber (eds), *Conquest and Union*, 223. 他方、コリンは18世紀の二重のアイデンティティはアングロ・ブリテンに比重があると指摘する。
- 34 王政復古期にイングランドの政治家兼著述家 Thomas Pope Blount がアングロ・ブリタヌスと称して作品『著名な著者の検閲』(1690年)を書いたが、彼の他の作品ではそのように自称されていない。
- 35 J. Dawson, 'Anglo-Scottish Protestant Culture and Integration in Sixteenth-Century Britain', in Ellis and Barber (eds), *Conquest and Union*, 87.
- 36 D.G. Mullan, *Scottish Puritanism, 1590-1638* (Oxford, 2000).
- 37 '1638 National Covenant' in *Scottish Historical Documents*, ed. by Gordon Donaldson (Glasgow, 1997) 194-201.
- 38 他方、アバディーン大学の一部の知的グループのように国民契約の署名を拒否して職を追われた者もいた。S.J. Reid, 'Reformed Scholasticism, Proto-Empiricism and the Intellectual 'Long Reformation' in Scotland: The Philosophy of the 'Aberdeen Doctors', c.1619-c.1641', in John McCallum (ed.), *Scotland's Long Reformation: New Perspectives on Scottish Religion, c.1500-c.1660* (Leiden and Boston, 2016) 149-178.
- 39 岩井淳 「「大反乱」から「ブリテン革命」へ：17世紀中葉の事件をめぐる長き論争」『イギリス哲学研究』34、2011年、97-105頁。1630年代から1650年代の内戦について新ブリテン史の枠組みから論じている先行研究として以下を参照。J. Morrill (ed.), *The Scottish National Covenant in Its British Context* (Edinburgh, 1990); L.A.M. Stewart, *Urban Politics and the British Civil Wars* (Leiden, 2006); A.I. Macinnes and J.H. Ohlmeyer (eds), *The Stuart Kingdoms in the Seventeenth Century: Awkward Neighbours* (Dublin, 2002); ジョン・モリル (富田理恵訳) 「17世紀ブリテンの革命再考」『思想』964、2004年、52-75頁。1645-6年について五王国戦争という解釈もある。J.H. Ohlmeyer, *Civil War and Restoration in the Three Stuart Kingdoms: The Career of Randal MacDonnell, Marquis of Antrim, 1609-1683* (Dublin, 2001).
- 40 D. Stevenson, 'The Early Covenanters and the Federal Union of Britain', in Mason (ed.), *Scotland and England, 1638-181*. 三つの取り決めにおけるイングランドとの交渉については以下を参照。富田理恵 「ユニオンとクロムウェル：スコットランドの視点から」 田村秀夫編著『クロムウェルとイギリス革命』聖学院大学出版会、1999年、196-227頁。岩井編『複合国家イギリスの宗教と社会』に所収されている以下の論文を参照。那須敬 「宗教統一を夢みた革命?：内戦期イングランドの宗教政策とスコットランド」53-81頁、富田理恵 「ブリテンの国制構想とスコットランド・イングランド：1647年の転換」83-114頁。
- 41 White, *Militant Protestantism*, 90.
- 42 S. Waurechen, 'Covenantar Propaganda and Conceptualizations of the Public

- During the Bishops' Wars, 1638-1640', *Historical Journal* 52:1 (2009) 63-86, esp. 70. 他方、反契約派の詩も書かれた。例えば、1640年8月にはブルータス伝説及びウェールズ起源を援用して反スコットランドが主張されている。C.H. Firth, 'Ballads on the Bishops' Wars, 1638-1640', *Scottish Historical Review* 3 (1906) 257-273.
- 43 伊藤早織「ピューリタン革命期のスコットランドと合同問題：聖職者サミュエル・ラザフォードの宗教思想」『青山史学』22, 2004年, 65-83頁。他にはロバート・ベイリの作品も反カトリックプロバガンダであった。
- 44 '1643 Solemn League and Covenant', in *Scottish Historical Documents*, 208-210; *A Solemn League and Covenant* (Wing, S4446).
- 45 スコットランドが提出した原案の第一項では、スコットランドが真のプロテスタント改革教会であるということが示されていたが、イングランドでは同箇所が曖昧な表現に修正された。E.J. Cowan, 'The Solemn League and Covenant', in Mason (ed.), *Scotland and England*, 182-202.
- 46 Macinnes, *Union and Empire*, 72.
- 47 '1643 Solemn League and Covenant', in *Scottish Historical Documents*, 208-210.
- 48 松谷好明『ウェストミンスター神学会議：その構造化』一麦出版社、2000年。
- 49 他方、長老派對独立派という伝統的な二項対立図式に異議を唱える研究もある。Hunter Powell, *The Crisis of British Protestantism: Church Power in the Puritan Revolution, 1638-44* (Manchester, 2015).
- 50 '1647 Engagement', in *Scottish Historical Documents*, 214-218.
- 51 A.I. Macinnes, *The British Confederate: Archibald Campbell, Marquess of Argyll, c.1607-1661* (Edinburgh, 2011). スコットランドの急進的契約派及び保守的な前王党派にとって「対等」な連合が重要であった。A.H. Williamson, 'Union with England Traditional, Union with England Radical: Sir James Hope and the Mid-Seventeenth-Century British State', *English Historical Review* 110 (1995) 303-322.
- 52 *A Proclamation or Act by the Parliament of Scotland* (London, 1649) (Wing, S1326).
- 53 S. Adamas, 'In Search of the Scottish Republic', in S. Adamas and J. Goodare (eds), *Scotland in the Age of Two Revolutions* (Woodbridge, 2014) 97-114. ただし1651年1月のスコットランドでの戴冠式ではスコットランド王と記述されていた。'The True Manner of the Crowning of Charles the Second King of Scotland, on the First Day of January, 1650' (London, 1651). ロシアなどの外国から発信されたチャールズ一世処刑に対する抗議の文書の中でもチャールズ二世はブリテン王と記載されている。
- 54 イングランドの王党派は、中央政權から検閲されながらもニュースブックを出版し王権の支持を訴えていたが、スコットランドに対して否定的な見解を抱いていた。J. McElligott, *Royalism, Print and Censorship in Revolutionary England* (Woodbridge, 2007).
- 55 F.D. Dow, *Cromwellian Scotland 1651-1660* (Edinburgh, 1979); J.D. Grainger, *Cromwell Against Scots. The Last Anglo-Scottish War, 1650-1652* (East Linton, 1997); P. Little, *Lord Broghill and the Cromwellian Union with Ireland and Scotland* (Woodbridge, 2004).
- 56 クロムウェルの宣誓に関するスコットランドの議会文書では、政府は「イングランド、スコットランド及びアイルランドそしてそれらに属する領土のコモンウェルス」と記載されている。'16 Dec, 1653', *Acts of the Parliaments of Scotland* (Edinburgh, 1814-75) vol.vi, pt.ii, 812.
- 57 'Ordinance for Union, 12 April 1654', in *Scottish Historical Documents*, 224-225; APS,

vol.vi, pt.ii, 816.

- 58 クロムウェル体制の再評価については以下を参照。大澤麦「オリヴァ・クロムウェルの護国卿体制と成文憲法」『法学会雑誌』56:1、2015年、329-359頁。
- 59 S. Kelsey, *Inventing a Republic: The Political Culture of the English Commonwealth, 1649-1653* (Manchester, 1997); Williamson, 'Union with England Traditional', 314. 本稿の主張とは異なるが、ブリテン国家の創出として論じたものは以下。岩井淳「コモンウェルスを創出する：ピューリタン革命と政治文化」『人文論集』63:2、2012年、41-74頁。
- 60 1649年以降に出版された諸作品あるいはスコットランド議会文書の中でチャールズ二世はブリテン王として称されることが多い。APS, vol.vi, pt.ii, 904. この時期に「ブリテンのスコットランド人」と称してラテン語で詩や哀歌をまとめた作品集は、スコットランド教会聖職者ディヴィッド・リーチの『添え飾り』(1657)のみ確認され、二重のアイデンティティが強調されることはなくなった。
- 61 例外として、1654年に89歳で死去したクロムウェルの母エリザベスの死の碑文の文言の中で「グレート・ブリテン及びアイルランド等のプロテクターの母」という尊称が用いられている。また、クロムウェルの後継者となった息子リチャードのプロテクター就任を祝って1658年に出版されたイングランド出身のウィリアム・ケイの作品の中で、リチャードに対して「グレート・ブリテン及びアイルランド等」という表現が用いられている。